



229号
2017 / 12 / 1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
〒195-0055 町田市三輪緑山2-18-19 寺西方
☎044-986-4195
<http://wanli-san.com/>
Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



「巨大ベンツ、乗るのは誰？」 ドイツの高級車、メルセデス・ベンツが2005年に生産を開始した中国北京工場の累計生産数が100万台を超えたそうだ。ガラスが輝く超高層ビルの間を走り抜けてゆく車はどれもピカピカ。巨大ベンツに北京の鼻息を感じるようだ。北京朝陽区・世界貿易センタービル中庭にて

撮影：雷子瑤

集思広益

— 中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から — 文と訳・^{ういくす}有為楠 君代

今月の言葉は、中国語で^{jí sī guǎng yì}集思広益、日本語の意味は「衆知を集めて有益な意見を広く吸収する」という意味だそうですが、皆さんご存知でしたか？ お恥ずかしいことに、私は知りませんでした。

この言葉は、日本人の間で、中国の歴史上の人物の中では、孔子と並んで有名な、そして孔子より多くの人に好かれている、諸葛孔明が使った言葉なのだそうです。ご存知のように、諸葛孔明は日本での呼び名で、中国では諸葛亮と呼ばれています。因みに、孔明は、^{あざな}諸葛亮の字です。

この幼児向けのお話は次のようなものです。

「三国時代、劉備（蜀の初代皇帝）は臨終を前にして、国家の運営を諸葛亮に依頼し、諸葛亮に、劉邦の子供・劉禪を補佐して国を治めさせました。

ある日、楊と言う下っ端の役人が、諸葛亮に言いました。

『大臣様、あなた様は素晴らしい才能と大きな力をお持ちなので、そのお力は、国の大きな仕事を処理する時にお使いください。毎日の細々した仕事の処理にお時間を費やすべきではありません。そのようなことは、配下の役人達でも処理できます。若し難しい問題が起こった時でも、彼らは皆で知恵を出し合って、うまく処理するでしょうから』

それを聴いて、諸葛亮は尤もだと思い、彼の意見を取り入れました。その結果、諸葛亮の負担は軽くなり、毎日の国の政治も滞りなく行われました。大分経って、この楊と言う役人が亡くなった時、諸葛亮は、彼のために特に追悼文を書きました。その追悼文の中で、諸葛亮は次のように言いました。『あなたの提案に従って、多くの人を国家の仕事に参加させ議論をさせたので、大勢の人達の知恵と意見が集まって、非常に良い結果を得ることができました』。

言葉の意味は、大勢の知恵を集め、有益な意見を取り入れれば、どんなことでも良い結果を得ることがで

きる。使用例として書いてあるのは、「この件は、皆で何度も相談したので、最後には、衆知を集めて有益な意見を広く吸収して、素晴らしい解決方法を見出した」という文です。

乏しい知識と、独断的判断による私にとっての諸葛孔明は、三国の中で決して強力ではない蜀の国を背負って、孤軍奮闘した人、と言うイメージでしたから、言ってみれば民主主義を先取りしたようなこんなお話は新鮮でした。又、下っ端の役人が丞相に意見を言うことが出来、丞相もその意見を取り入れた、と言うお話にはビックリしました。

考えてみれば、諸葛孔明という人は、実際にも素晴らしい人なのでしょうが、《三国志演義》の中でヒーローに祭り上げられたことで、より多くの人々から一層の関心を集めたようです。特に赤壁の戦いの時には、祭壇を設けて天に祈りを捧げて東風を呼び寄せ、川下からの船による攻撃を成功させたという話があり、妖術が使える人だったとの印象を与えました。

しかしこの妖術の話は、《三国志演義》の創作で、あの地方は気象条件によって時折強い東風が起るので、観天望気の知識がある孔明が、東風発生の予兆をとらえて作戦を実行したのだ、と言う解説があります。更には、史実を見ると、赤壁の戦いにおける諸葛孔明の貢献の度合いは低いのだそうですが、我々はどうしても、《三国志演義》や映画《赤壁》で語られる孔明の活躍を、本当のことだと信じてしまいます。

日本にいる我々は、中国人の記録好きな国民性のお陰で、何千年も前の人々の様子をも知ることが出来ます。それも一つや二つではなく、様々な角度から考察したものを読むことが出来、自分なりの〇〇像を作り出すことが出来るのですから、有難く、また楽しいことですね。



Bù bǎo qí wǎng yě
不保其往也おう たも
其の往を保たざるなり〈述而第七〉うえだ あつ お
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

人を出身地によって差別しない。これは今日ではだれもが共有する、いわば常識の一つです。しかし実際はどうなのでしょう。例を挙げるまでもなく、これに相反する現実を私たちは世界各地で目にしています。

では、孔子の生きた時代はどうだったのでしょうか。こういった差別意識は、やはり根深いものがあったようです。『論語』に「互郷難与言 (Hù xiāng nán yǔ yán) (互郷与に言に難し)〈述而第七〉」という言葉が出てきます。互郷という地域の人たちとは、まともな口がきけない、という意味です。「互」とは地名、「郷」とは村を幾つか合わせた行政単位の一つです。互郷は当時、土地柄の良くない地域とされていました。なぜそうなのか、詳細は記されていませんが、こういう地域は当時、各所にあったようです。ちなみに孟子の母親は、幼い孟子を教育するために、土地柄を選んで三回も引越したとされています。この話は「孟母三遷」〈『烈女伝』『蒙求』等〉の美談として、日本でも代々語り継がれてきましたが、見方によっては、地域差別の実例とも言えます。

それはさて置くとして、ある時、この互郷から一人の少年が、孔子に会いたいと言ってやってきました。当時の常識からすれば、こんな地域から孔子に会いたいという人物が現れること自体、あり得ないことでした。とは言え、師匠に会いに来た者を師匠に無断で追い返すわけにもいかない。門人たちは、どうしてよいか分からず、ただ迷うばかりでした。文面には「童子見，門人惑 (Tóng zǐ jiàn. Mén rén huò) (童子見ゆ。門人惑う)」とあるだけですが、この間に相当激しい議論が交わされたことが想像されます。

この様を目にした孔子は、次のように言って門人たちを叱りました。

「与其进也。不与其退也。唯何甚! (Yǔ qí jìn yě. Bù yǔ qí tuì yě. Wéi hé shèn!) (其の進むに与するなり。其の退くに与せざるなり。唯だ何ぞ甚だしきや)。前に進もうという熱意を買ってやろう。折角やって来た者を追い返すとは、ひどい話ではないか、と。

孔子はさらに続けます。「人洁己以进，与其洁也。不保其往也 (Rén jié jǐ yǐ jìn, yǔ qí jié yě. Bù bǎo qí wǎng yě) (人己を潔くして以て進めば、其の潔きに与するなり。其の往を保たざるなり)。人が決意を新たにしてい前に進もうというのであれば、その心意気を買ってやれ。過去のことは、こたわらぬ、と。

孔子はまた「遂事不谏，既往不咎 (Suì shì bù jiàn, jì wǎng bú jiù) (遂事は諫めず、既往は咎めず)〈八佾第三〉」とも言っています。過ぎ去ったことにはこだわらない、ということです。これは弟子の失言に対して発した言葉ですが、今でもそれぞれ四字熟語として立派に通用しています。こんな所にも孔子の未来志向の片鱗を窺うことができます。

孔子は身分制度を重んじる立場の人でした。当時の社会が乱れていたのは、旧来の身分制度を無視する勢力が横行しているからだと考えていました。礼を重んじ、義を重んじたのはそのためです。そういった意味合いからすれば、孔子は保守主義者でした。

しかし、こと教育に関しては、しかと未来を見据えていました。しかも一人ひとりの個性と能力を考え、常に公平、平等を心がけていたのです。

(わんりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

▶ エスペラントと親近感あるアナーキズム

エスペラントは、世界共通語を使い、国家を超え民族を超えて人々と繋がろう、という考えが根底にありますから、おのずと国家を否定するアナーキズムに親近感があるはずで、しかしだからと言ってエスペランティストが即、アナキストというわけではありませんし、またアナキストがすべからずエスペラントを学ぶということもありません。

仔細にエスペラント界を眺めて見れば、大勢は政治に対しては中立的な立場、いや、現実の政治に対して積極的に関わろうとする人がとりわけ多いともいえないでしょう。

しかし今回登場する山鹿泰治は、エスペランティストにしてアナキスト、その関係は不即不離、エスペラントとアナーキズムがいわば一心同体のように自己の中に体現されていた稀有な存在かもしれません。

▶ 印刷工として生きる

山鹿は1892(明治25)年、父・善兵衛、母・京の子供として、京都三条烏丸に生まれました。13人兄妹の第12子でした。父は京呉服の行商で長崎へ行き、長崎奉行所の通訳でオランダ学者・本木昌造と出会い、西洋染織の知識を得ると共に弟子となり、活版術を伝授されました。そして本木は善兵衛に、京都で印刷所を開かせました。

しかし京都は首都を東京に譲り、新しい印刷術のような商売は東京や大阪と違って繁盛するとはいかなかったのです。家業が苦しい時代、山鹿はインクつけや紙取りなど小僧のような仕事をやらされました。

このような環境を嫌った山鹿は15歳の時、知人の中村弥二郎を頼って東京に出ました。そして弥二郎が社長をしている有楽社に住込み小僧とし

て入りました。東京銀座の隣、有楽町にあった出版社が有楽社です。社長が中村弥二郎、弟の竹四郎も勤めていました。支配人が安孫子貞次郎です。

この安孫子が熱心なエスペランティストであり、社長の中村弥二郎もその賛同者であり、日本最初のエス日辞典やガントレットの『エスペラント読本』『月刊ヤパーナ』『エスペラント』などを刊行し、また前年にできた日本エスペラント協会(略称JEA)の事務所が有楽社の中に置かれていたのです。山鹿も有楽社の社員有志が集まってできたエスペラント講習会に誘われて参加するようになりました。

▶ エスペラントにのめり込む

講師は黒板勝美、東大史料編纂課に勤める文学博士であり、初期日本エスペラント運動の指導者でした。30人ほど参加した講習会は3回ほど続いたところで、続々と脱落者が増え、とうとう山鹿一人が残り、いつしか講習会も中断しました。

しかし山鹿は中学時代、英語の試験の際、白紙答案を出して零点だったことがあったようで、それもあってか、「よし、石にかじりついてもエスペラントだけではモノしようと思った」(晩年に回想した「たそがれ日記」)ようです。そして有楽社から出ていたザメンホフの『練習題集』と二葉亭四迷が出した『世界語』を独習するのでした。

またその頃山鹿は、銀座でキリスト教の一派、救世軍の銀座小隊で洗礼を受けてキリストの兵士になっていました。山鹿は毎晩仕事を終わると、銀座四丁目の銀座本営に出かけ「迷える魂を救うためにサタンと闘った」と書いています。また日記には、こうも書かれています。

「非合法に遊郭から脱出してくる女の解放のために、救世軍が石を投げられたりなぐられたりし

第十九回 放浪のアナキスト 山鹿泰治 I
ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』
大類 善啓(おもしろいよしひろ)

ながら働くとき、私の正義感は大いに満足した。しかし、ブース大將にひきいられた救世軍は、軍隊組織そのまま命令絶対服従の専制で、私の良心をしばしば悩ました。またエスペランティストとして、イギリス一辺倒のあり方は不愉快きわまるものであった」と回想しています。

➤ キリスト者からアナーキストへ

有楽社に一人の熟練した印刷工が入ってきて山鹿の隣の席に座りました。原田新太郎と名乗る、おとなしそうな青年は山鹿の赤い救世軍帽子を見て、「キリスト教では、天皇や政府をどう考えるか」と聞いてきました。山鹿は即座に「聖書に、汝ら王の権威に従うべし、そはすべての権威は神より出しものなれば、とある」と返答しました。これはいつもやっている救世軍の伝道方法でした。

原田はそれに対して「神は人間を創ったというのに、その人間がなぜ喰ってゆけないのか、神は公平だというのに、なぜ金持ちと貧乏人、病人と健康者の不平等があるのか」など、次々に山鹿を問い詰めました。そして「もともとキリストは歴史上非実在の人物で、作り話にすぎない」と言うと、山鹿は答えることができませんでした。

原田はアナーキズムの信奉者でした。そして山鹿に、「これは国禁の書だ」と言って極秘で貸してくれたのが幸徳秋水訳の『パンの略取』(平民社刊)でした。山鹿はそれをむさぼるように読み、社会を見る目がまったく変わってしまいました。キリスト教徒からアナーキストへの思想的な転換でした。

➤ アナの巨人、大杉栄に会う

原田が熱心にアナーキズムを勧めるので、ある日エスペラント語でアナーキストの大物である大杉栄に手紙を出したところ、大杉からすぐに「次の日曜、三越の待合室で待つ」という返事がエス文で来ました。

その日、山鹿は原田と一緒に三越で大杉を待っていると、縞の背広にパイプをくわえ、特徴ある大きな目玉をぎょろつかせて大杉がやってきました

た。当時、大杉は危険人物として官憲の尾行がついていましたが、尾行をまいて、人が多い三越を選んでやってきたのです。

山鹿は、自分がエスペランティストで印刷工だと自己紹介をしましたところ、大杉は大仰に、「西洋でも印刷工が革命の先頭に立っている。エスペラントは世界の労働者が団結するための最も有力な武器だ」と山鹿を大いに励ましたのです。

尾行する男が大杉にまかれてしまうとその日の日当が出ないので可哀そうだと、大杉は彼のいそうなところを探しながら日比谷公園まで歩き、ベンチに座り込み、暗くなるまで山鹿たちと話して別れました。この半日の大杉との対話は、山鹿の生涯を決定するものとなりました。その夜、山鹿は寝床の中で、自分がこれから歩もうとしている道を考えて興奮して眠ることができませんでした。

➤ キリスト教と訣別

山鹿は翌日、救世軍の集まりに出かけ、「今日から私はキリストと訣別する。そして無政府主義者の後を追って働こうと覚悟を決めた」と宣言したのです。とは言うものの、「神を捨て切れず苦しんでいる。しかしアナーキストの中に、神を信じる人はひとりもいないと聞いて悩んでいる」と翌月、大杉と並ぶアナーキズムの巨人、石川三四郎に会い、石川から彼の神観を聞き、ようやく神が宇宙天地の支配者で最高の権威だという迷信から目覚める糸口をつかんだのでした。石川の神観とはどのようなものだったのか、残念ながら山鹿の回想からは見つかりません。山鹿は後年、もうほとんど忘れてしまったと回想していますが、エスペランティスト山鹿がアナーキズム運動へ大きく転進する契機になったのです。この時代は、1911(明治44)年、大逆事件直後の共産主義者やアナーキストたちへの厳しい監視と弾圧があった暗黒時代ともいうべき時代でした。山鹿の決意は並々ならぬものだったと言えるでしょう。

東西文明の比較(20)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

478年に倭王の武(ワカタクエル=雄略天皇)が宋に朝貢して以降、倭は1世紀以上も中国王朝との通交を絶っていました。その間、高句麗・百済・新羅の朝鮮の3国は、宋(南北)の王朝の冊封を受けていましたから、倭の特異な国情が目立ちます。しかし、倭はその間百済との交流は続けていましたから大陸の情報は入手できていました。その頃の中国は、宋が南北に分裂し、韓三国は互いに争っていましたから、倭はそれらの紛争に関わりたくない、意識的に距離を置いていたのでは

はないでしょうか。

その大陸では大きな動きが出てきました。589年に北朝の隋が南朝の陳を滅ぼして隋帝国を築いたのです。当然ですが韓三国は、それぞれ隋から冊封を受けています。

600年に遣隋使を派遣

「隋書・倭国伝」には次のような記述があります。

「開皇二十年(600年)、倭王、姓は阿^あ毎^め、字は多^た利^り思^し比^ひ孤^こ。使を遣^{みかど}わして闕に詣らしむ」と。

韓三国の王は、朝貢に際して中国式の名を名乗っていました。例えば、高(高句麗王)、餘(百済王)、金(新羅王)などです。かつては、倭の五王も倭姓と「讚・珍・濟・興・武」などの個人名を使っていました。しかし、新たな通交をはじめたこの時代から姓は阿毎、字は多利思比孤とされました(通訳が名乗った姓名を誤訳したという説もありますが)。中国の「姓」の制度から離脱したのです。ところがこの遣唐使のことは「日本書紀」には触れられていません。その理由は分っていません。

「日本書紀」によれば、この7年後の607年(推古15)、「小野妹子を隋に遣わす。鞍^{くらつりのふくり}作福利を以て通事(通訳)とす」とあります。小野妹子たち遣隋使の目に映った光景、100余年のブランクはいかがなものだったのでしょうか。百済との交流で情勢は知っていたとはいえ、実際の見聞には、相当の違いがあったことでしょう。

600年の遣隋使が帰国して間もない603年(推古11)、冠位が制定され、氏制度(家系中心)のなかの特定の個人を官人に登用し、功勞によって昇進する制度も創設されました。「冠位十二階」制定の4年後の遣隋使小野妹子は、「大礼」の冠を与えられて隋へ向かいました。

「冠位十二階」が制定された翌604年(推古12)、憲法十七条が制定されました。この憲法は、君・臣・民の秩序を整え、仏教や儒教によって国制の骨格を定め、大王の根源を神話ではなく、中国の政治思想に求めたのも、600年の遣隋使の功績といえるのではないのでしょうか。

戦乱の幕開け

この時期の東アジアは風雲急を告げます。598年、隋の文帝が高句麗に大軍を派遣します。ところが高句麗はこれを撃退します。文帝の次の煬帝も612年に百万と言われる大軍を派遣しますが、高句麗は抵抗します。煬帝は、次々と大軍を送りましたがその全てが敗走しました。その結果、煬帝は殺害され、隋は618年に滅亡します。わずか30年の命でした。

このような状況(戦乱)のもとで遣隋使を派遣したのです。この時も「遠交近攻」の策を用いて魏と有利な関係(三国志の時代、魏は呉を挟撃するために倭と同盟した。前号を再読してください)を築いた卑弥呼の例に学んだのでしょうか。608年小野妹子が再び隋に渡るとき、多くの留学生や留学僧を連れて行き、新知識の吸収に全力を挙げます。その一方で、彼らは帝国の興亡を身を以て体験したのではないのでしょうか。先進文化の取得と、争いご

との帰趨を学んだことは、その後の日本の運営に役立ったことでしょう。

唐が隋に成り代わって帝国を引き継ぎました。623年(推古31)、新羅経由で帰国した留学僧の恵日えいちらは、隋に送った留学生の召還と、唐との国交の開始を進言します。そして630年、第一回の遣唐使が派遣されることになりました。この時も倭は冊封を受けずに唐との国交を開くことに成功します。

戦乱が続く朝鮮半島

過去2回の遣隋使派遣に続き、都合19回、約230年にわたる遣唐使の時代が始まります。遣唐使といえば、古代日本が唐の進んだ文化を受け入れて国家体制を整え、古代文化を築いたこととして、阿倍仲麻呂あべのなかまろや吉備真備きびのまきびなどの留学生や空海などの留学僧の功績を思い描きます。しかし、そうした時代の唐は、想像以上の混乱期だったようです。宮廷における「権力争い」まで学んでいたのか、と思うと少し残念な気がします。

韓三国の高句麗・新羅・百済は、それぞれの国内で主導権争いが頻発し、三国間でも争いが絶えなかったようです。百済では641年、義慈王ぎじが即位しますが、支配層が対立。クーデターで権力を掌握した義慈王は、翌年新羅に侵攻します。新羅は王族の金春秋こんしゅんじゅう(後の武烈王ぶれつおう)を高句麗に派遣して援助を求めますが、高句麗は領土の割譲を求めます。それに対して金春秋は拒否、その結果囚われの身になりますが、かろうじて救出されます。高句麗では宰相せんがいの泉蓋蘇文せんがいそぶんが、国王をはじめ大臣以下100余人を惨殺し、傀儡の王を擁立し、百済と結んで新羅を攻撃します。韓三国は、唐に対しても朝貢して冊封を受けていました。冊封を与えている以上、唐の皇帝は、それぞれの国の争いを調停しなければなりません。645年2月、唐の太宗は高句麗の征討軍を自ら指揮して洛陽を出発します。

その頃の日本はどうであったのでしょうか。倭の飛鳥板蓋宮いたぶきのみやで、蘇我入鹿そがのいるかが暗殺されるという宮中クーデター(乙巳の変)が起ります。645年6

月のことです。大臣の地位を父の蝦夷から引き継いだ入鹿は、有力な皇位継承者であった山背大兄王を襲い、一族を滅ぼしてしまいます。そして、蘇我の血をひく古人大兄を即位させて権力を握ろうとしていたのですが、そのもくろみは見事に失敗します。このクーデターの主役は、中大兄皇子(後の天智天皇)と藤原鎌足です。

新制度の始まり

蘇我一族が消滅すると、皇極女帝は退位し、弟の孝徳天皇が即位します。初めての生前譲位です。これまでの朝廷では日嗣の御子や太子が定まっても、先帝の死によって自動的に即位することはなく、朝廷を構成する豪族たちの推戴によって即位し、群臣によって大王位を象徴する鏡や剣などの神器が献上されました。この時以来、新規に即位した大王は、新たに大臣・大連らを任命することになりました。先帝時代の再任でも改めて新任することにしました。これらのことは皇位継承の権利が独立したことを意味します。

大化の改新政権の発足

中大兄は孝徳天皇のもとで皇太子となり、鎌足はその腹心として内臣になりました。それまでの大臣を左大臣・右大臣に分け、官僚化を図りました。更にブレーンとして国博士を設け、唐留学から帰国した僧旻そうみんと高向玄理たかこゝろまろを任じました。大化の改新は直ちには実現しませんでした。国制の基本的な変革の方向性を示し、その第一歩を踏み出した意義は大きいと思います。

雑感ですが・・・この文を書きながら思ったことです。

高句麗は、現在の北朝鮮と旧満州の一部(遼寧省+吉林省)を領土とする強大な国家でした。昨今の中朝関係、特に北朝鮮の中国に対する態度もこうした歴史を知れば、一筋縄ではいかないようです。と同時に「遠交近攻」策を利用して、日中関係を好転させる「策」があるのではないかと思う次第です。いかがでしょうか？

前号に引き続き、5月13日の行動目的のもう一つ、老虎会のKさんから依頼された満州国時代の建物の現状確認についてお話ししたい。確認すべき4つの建物をここに再記すると——①星ヶ浦ヤマトホテル ②満鉄総裁邸 ③双葉学院 ④浪速寿司——である。これらの建物は頂いた資料からすると、いずれも大連市内の中心部周辺にある。

まず①の星ヶ浦ヤマトホテルの探索からスタートした。星ヶ浦は、現在は市の中心部からやや西寄りの星海公園あたりの海岸線沿いの地名だ。「星ヶ浦」と聞くと、当時大連で生活していた人からすると甘く切ない気持ちになると思われる。戦前は大連一の海水浴場で風光明媚な場所であった。親子連れで星ヶ浦に海水浴に来られた方は多いであろう。資料の写真からすると海岸を望む場所に建っていてそのあたりに車を停めたが、写真の建物は見つからず低層のマンションがいくつか建っている。友人に近くにいた年配の人に写真を見せて訊いてもらったが、この建物はすでにないと言う返答であった。星ヶ浦ヤマトホテルは設計者は不明であるが豪華客船に似た外観で、洒落たデザインであるが、二度と見られないとは誠に残念である。ここもひとつの歴史がなくなったのだ。考えてみれば今から80年以上前に建てられたのであるから



元満鉄総裁邸と筆者

老朽化し取り壊されたのは仕方がないことであるが。それに引き換え、中山広場に面している大連ヤマトホテル（1914年竣工）は大連賓館というホテルに姿を変え、今に雄姿を残していて褒めてあげたい気持である。私も一度このホテルに泊まったことがあるが、流石に年月を感じさせる。

次に②の満鉄総裁邸を探すことにした。場所は「市内沙河口区黒石礁」とあり、星ヶ浦ヤマトホテルからすぐ近くである。頂いた資料では、「中村與資平記念館」となっている。前号に書いたように、第14代総裁を務めたあの松岡洋右（1880年～1946年）邸であり、彼は1935年8月から1939年3月の約3年半総裁を務めたが、そのあとくらいに中村與資平が入居したのかもしれない。満鉄初代総裁の後藤新平邸は旧大連市役所のそばであるから、総裁邸も何か所かあったのであろう。

ところで「中村與資平」は次のような人物である。彼は、1880年に浜松市で生まれた。名建築家の名を欲しいままにし、朝鮮、旧満州及び静岡県などで多くの銀行や公共建築物を設計した。作品は、朝鮮銀行本店、朝鮮銀行大連支店、静岡銀行本店、静岡県庁本館、静岡市役所など枚挙に暇がない。松岡洋右と同年生まれであるが66歳で病没した松岡と違って中村は83歳の生涯であった。

さて総裁邸であるが、あったのである。裏道を何度か回っているうちに写真と同じ建物が目の前に現れたのだ。嬉しかったのは言うまでもない。これでKさんに胸を張って報告ができる。あれこれ書くより写真を見ていただく。流石に立派なレンガ造りの邸宅である。ただがっかりしたのは、記念館として残っているのではなく、中国人の住居となって



在りし日の「星ヶ浦ヤマトホテル」(ウィキペディアより)



昔の星が浦、現在の名は星海公園 (M氏提供)

いたことである。

ここを後にして③の双葉学院を目指した。頂いた資料には、「双葉学院 日本在住のアメリカ人建築家ヴォーリズの設計。1939年竣工。青泥街11号」と書いてある。双葉学院は、ミッションスクールである。ヴォーリズは大連に住んだ記録はないが、何度か出張で行っていたらしい。友人に聞くと、この住所は大連駅の近くだと言う。行って見たが大連駅の周辺は再開発されているのかそれらしき建物や街並みも残っていない。80年近く前の建物ということもあるが、再開発のため取り壊されたのかもしれない。当時の写真を見ると三角屋根の教会風の建物である。

ここでヴォーリズがどのような人物が紹介したい。彼も1880年に、アメリカ・カンザス州で生まれた。1905年キリスト教伝道の目的で来日し、滋賀県・近江の商業学校の英語の教師となった。その後建築設計の仕事をした。日本で多くの西洋建築を手がけた建築家であるが、もう一つ実業家の顔を持っていた。彼は3人の友人と合名会社を立ち上げた。後に近江兄弟社となり、メンソレータムを広く日本に普及させたのだ。1919年、子爵一柳末徳ひとつやなぎすえのりの三女・満喜子と結婚。1941年戦時下で国籍を変え、日本人一柳米来留ひとつやなぎめれるとなる。終戦後は、二つの母国の懸け橋となり積極的な働きをした。83歳の生涯を終えるまで近江八幡市に住んだ。彼の設計した建物は前出の中村與資平に引けを取らない。

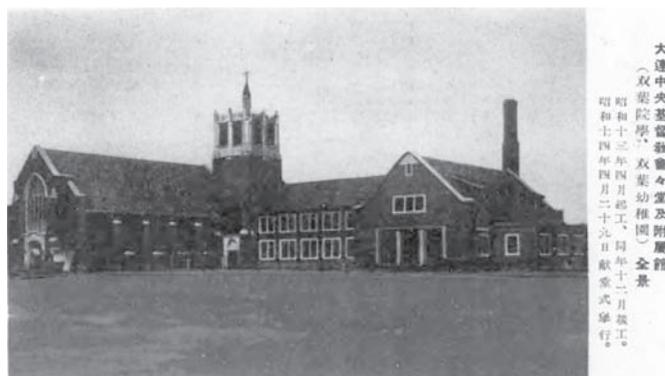
一つだけ作品を挙げたい。それは関西学院大学・上ヶ原キャンパスである。彼は、親交のあった同大学の4代目院長(米国人)から頼まれ、キリスト教

主義をその基調に置く関西学院大学に相応しい景観を造り上げた。キャンパスの中央に芝生広場がある。芝生広場の中心を軸とし、背後の甲山の頂上を起点とし、時計台から中央広場を貫きそして正門に一直線と伸びる様は、見た様子は異なるが法隆寺の伽藍を彷彿とさせそれはそれは美しい。見てきたようなことを書いたが、実は私の家の近くに同校を卒業された方が住まわれている。その方から「母校通信」という冊子をお借りしたが、その中に書かれていたものである。掲載の写真を見ると、一つ一つの校舎は勿論美しいが、全体の統一感が日本人にはない感性を感じさせる。

依頼された建物の最後は、④の浪速寿司である。浪速寿司というくらいであるから当時の浪速町にあった。浪速町は、大連の街をご存知の方はお分かりと思うが、大連駅と友好広場の中間あたりにあった町である。早速そちらに移動して3階建ての建物を探したが街並みは一変しており残念ながら見つけれなかった。浪速寿司の建物(1935年竣工)を設計した建築家「横井謙介」について簡単に紹介をしたい。

彼は、1870年生まれで大陸に渡った後満鉄に就職した。いくつかの建物を設計したが、満鉄を退社後大連に建築事務所を開設した。彼の代表作は、遼寧省・瀋陽にある「奉天ヤマトホテル」である。1929年に竣工している。72歳で没するまで旧満州の多くの建物の設計に携わり、大連などの近代化に貢献した。

4つの依頼された建物のうち、現存が確認できたのは一つだけであったが私は満足している。Kさんの依頼により紹介した建築家の一生を知ることが出来、大連の街の発展に如何に寄与してきたのかが



大連双葉学園全景(日本組合基督教会便覧、昭和15年より)

分かったからだ。満鉄総裁の街づくりの役割は極めて大きいし、業績は後世に残る。しかし実際に街の建物を設計し、街並みを造り上げていったのは彼ら建築家達であることを忘れてはならない。常日頃さほど日の当たらない仕事であるが、彼らを大いに評価したい。かくして5月13日は終わり、案内してくれた友人たちと食事をしたが、彼らも私に引きずられるようにして大連の歴史に興味を覚えてくれたようで、これはうれしいことであった。

急にこのシリーズで一つ書き忘れたことを思い出した。それは(その1)で友人の娘さんが8月初旬に出産予定で、その結果を知らせたいと書いたことである。実は7月31日、予定日より1週間早く無事に5.7斤(2850g、1斤=500g)の女の子が生まれたと微信で報告があった。出産は「剖腹産」とある。帝王切開のことだ。粉ミルクを3缶も必死で運んだのに、「母乳很多、不要奶粉」と素っ気ない。私をねぎらう言葉は無い。3缶は一体どうするのであ

ろう。3か月経ったころ、女の子の写真を送ってきたが、丸々と太って美人であった。



5月14日は、友人に絵葉書を書いたり、街中をぶらぶらしながら孫へのお土産を買ったりした。日本は5月の第2日曜日は「母の日」であるが、中国も同じである。商店街にはカーネーションを売っている女の子をあちこちに見かけた。楽しい日々の過ぎ去ることの早いこと！中国語で「時間過得真快！」というが明日の15日は帰国の日である。15日は朝8時20分発の便なので6時にホテル前から地下鉄に乗り空港に向かった。 (おわり)



5月10日から15日までの6日間、5回に分けての旅行記は本稿で終わります。

次号からは、今年(2017年)10月19日から一週間訪れた四川省の旅行記を掲載する予定です。

中国の笑い話 35 (「365夜笑話」より)

翻訳：有為楠君代

第119話：経験談

作文の時間に、先生が学生にたずねた。

先生「誰か、アメリカの作家・ヘミングウェイの創作のエピソードを知っているかな？」

学生「僕、知ってます！彼は創作する時は立って書いて、座って手直しをしました」

先生「彼はどうしてそうしたのか、分かるかね？」

学生「文章を書く時は椅子が壊れていました。手直しをする時には、修理してくれる人がいて椅子は直ってきたのです。僕は家で作文の宿題をする時も丁度このようでした」

第120話：項羽とナポレオン(項羽、拿破侖)

先生が作文の題を出しました。

先生「項羽とナポレオンについて論述せよ(談項羽拿破侖)」

そそっかしい学生が、すぐに書き始めた。

学生「項羽は力持ちだったので、ちっぽけな“破輪”(中国のPCゲーム)を捕まえ(拿)られないわけ

がない」

(※ナポレオンを知らず、拿破侖^{ná pò lún}を「破輪を捕まえる」と読んだ間違い。清朝末期・西大後の治世下で行われた科挙試験で、ナポレオンを知らない受験生が破侖を破輪と読み違えた事実がある)。

第121話：お母さんは一人

トムは、双子で生まれたお兄さんのジムと同じラスです。

先生は子供たちに、「私のお母さん」と言う題で作文を書かせました。ジムが作文を仕上げると、トムはそれを写して出しました。翌日、先生はトムに言いました。

先生「君の作文は、ジムの作文と全く同じだったよ。これはどういうことかナ？」

トム「先生、僕のお母さんは、ジムのお母さんと同じ人なんですよ！」

4年ぶりの北京旅行は快適そのもの、しかも充実していた(前編) 為我井 輝忠

4年ぶりの北京旅行に出かけた。1年中で最も気候が良いと言われる北京の秋を満喫すべく10月23日から11月5日までの13日間滞在した。正に毎日青空をのぞかせた北京の秋はスモッグもない、大気汚染PM2.5もなんのその、快適な滞在を楽しむことが出来た。

今回北京行を決めたのは長年の友人である周路(Zhou Lu)氏が11月2日から6日まで30年に及び芸術活動を記念して展覧会を開催するという案内をいただき、それではぜひとも見たいと思い、“わんりい”の関係者3人(田井、杉野、高橋の3氏)と出かけた。ただ他の方たちは私よりも遅く出発したので、11月1日に宿泊予定の北京ミレニアムホテルで落ち合うことにし、私は一足先に出発した。

10月23日北京空港第3ターミナルに夜8時30分過ぎに(30分ほど遅れた)到着し、機場線(Airport Express)で東直門駅へ向かった。駅を出てタクシーを探したが、なかなか見つからず困っていると、近くに警察官が2人いたので、ホテルまでどのくらいあるか、またタクシーを探してほしいと頼んだ。すると、スマートホンでしばらく探していたみたいで、何とタクシーを呼んでくれた。しかし、よく見かけるタクシーではなく普通の乗用車のようなであった。警察官が100元だがいいかと聞くので、相場が分からずOKと言いながら、何だか高そうな気がした。後で気が付いたが、やはり相

場よりずいぶん高かった(後で追記したい)。

今回は展覧会出席以外に胡同の調査と写真撮影及び歴史的に古いキリスト教会の訪問を目的としていて、翌日から早速動き回った。「胡同」とは北京や北方で古来モンゴル語の井戸・集落を意味していたが、後に井戸のある地域を指すようになり、同時に、その地域にある住居を四合院と言う伝統的な住居を合わせて総称している。街、横丁、道、路地等と共に「みち」を意味し、北京では特別な意味を持ち、北京の街そのものの代名詞となっている。北京には4,000とも5,000とも胡同があったと言われるが、今では600程度残されているようだ。長い歴史を有する胡同には、今も変わらず多くの人が住み、庶民的な生活が営まれている。

今回は主として3カ所の胡同(史家胡同、八大胡同、護国寺街)を回ってみた。先の2008年の北京オリンピックを境に広大な胡同が壊され、道路や大きなショッピングセンター、マンション等に作り替えられ、かつての伝統的な古い街並みが消滅していた。そうした場所を再訪して、今はすっかり変貌しているのを見て大変驚かされた。その反面、今も変わらず胡同が残されている地域も想像以上にたくさんあり、こうしたところを見て、まだまだかなり残されているのだと安堵した。今回はこうしたところを歩いてみた。

先ず訪ねたのは東城区にある史家胡同である。



北京で最初に宿泊した「北京新紅資客棧(New Red Capital Residence)」



2番目に宿泊した「北京容園賓館」



史家胡同博物館

実はこの胡同にあるホテルに滞在したので(3泊)、連日このあたりを歩いて胡同の雰囲気は大いに楽しむことが出来た。この胡同の特徴はもともとあった四合院を利用した史家胡同博物館があることで、昨年出来たばかりのようだ。ここには2回も来てしまった。昔の四合院の建物をそのまま利用して、当時の生活振りを知るだけでなく、この地域の成り立ちやこの地域に住んでいた著名人の紹介もされていた。史家胡同は名前からして由緒あるようなところで、実際多くの名士が住んでいたようで、今もところどころに立派な屋敷がある。どれも堅く門を閉ざしているので中を覗くことは出来ないが、先の博物館からそれらの姿は想像することが出来る。

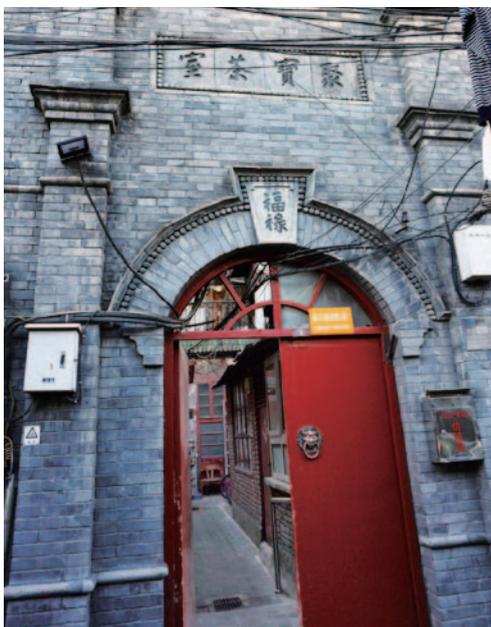
次に訪れた西条区八大胡同は実際にこのような名前の胡同があるのではなく、桜桃斜街、陝西巷、朱家胡同、韓家胡同、百順胡同、胭脂胡同、石頭胡同と言った胡同のある地域を総称したもので、解放前は遊郭があった地域である。前門駅で地下鉄を降り、大きな商店街大柵欄を抜け、観音寺街へ向かって歩いて行くと、にぎやかな商店街が消え、古めかしい商店やら旅館、民家が立ち並ぶ地域に出てきた。街の表示を見ると、陝西巷とある。いよいよこの辺りから昔遊郭があったあたりになるようで、もちろん今はそんなな

まめかしい雰囲気を示すものは何もない。しかし、ところどころ「おや!」と思わず唸ってしまいそうな建物があるのに気が付いた。

例えば、陝西巷を歩いていると、ごちゃごちゃした路地の一角に2階建ての石造りの建物がある。「雲吉班」と書かれた文字がかすかに読み取れる。まさしくここはかつての妓楼で、中国人ならば誰でも知っている小鳳仙と賽金花が籍を置いていたところである。同じ通りに「上林仙館」という高級妓楼があった建物が残り、今ではホテルに生まれ変わっているが、中を見ればまさしく当時の遊郭の雰囲気を発見することが出来る。

他にも「臨春楼」や「慶元春」、「聚宝茶室」等と言った妓楼のあった建物が残されている。まるで日本の吉原のような感じである。中には建物保存を示すプレートが掲げられている建物もあり、壊さず保存しているようである。このような猥雑さと古さと庶民性のある胡同を歩いていると時間はあっという間にすぎ、1日では足りないくらいである。もちろん何度も足を運んだことは言うまでもない。

最後に訪ねた胡同は護国寺街である。護国寺という寺がある地域で、2番目に滞在したホテルがある、正に庶民的な街並みの地域である。ここでのあるエピソードと言うべき出来事を紹介したい。狭い胡同を歩きながら写真を撮っていると、ある四合院を改造した家の前で偶然一人の年配の男性に出会った。



今も残る昔の遊郭の建物「聚宝茶室」旧址

この方に写真を撮ってもよいかと尋ねると、「どうぞどうぞ」と勧めてくれた。私が拙い中国語で話していたので、外国人と思い、英語で話し始めた。私が日本人だと言うと、急に顔を輝かせて、家の中に招き入れてくれた。名前を杜霖修(仮名)といい、息子が愛知県の愛知大学へ留学していたので、日本には大いに興味があり、しかも写真に関心があるとのことで、日本に行った時の写真を見せてくれた。もっと驚いたのは、中国各地へ



杜霖修ご夫妻と共に

写真撮影に出かけたという写真をパソコンで何百枚も見せてくれたことである。全国を写真撮影旅行した際の写真を紹介してくれた。素晴らしいものば

かりであった。私も写真に興味があり、北京の古い胡同の写真を撮るのが好きだと言うと、「それじゃ、昼食を食べてから、とっておきのところを案内しましょう」と提案された。

昼食後、カメラを手に白塔寺、歴代帝王廟、鼓楼、鐘楼、什刹海と周辺の古街等を案内してくれて、私の知らない胡同を見て回ることが出来た。最後に自宅に戻り、夕飯までご馳走してくれた。大連で働いているという息子さんに電話をし、私のことを紹介してくれて、話しをすることも出来た。日本に戻った後、写真を送ることや今後彼と写真を交換し、中国での再会を約束した。この日は正に忘れることが出来ない一日となった。(続く)

活動報告 ▶ 第20回 町田発国際ボランティア祭・2017 夢広場 2017年11月3日(祝) 場所:まちの駅・ぽっぽ町田イベント会場

毎年恒例の国際ボランティアまつり・夢広場が、11月3日に「ぽっぽ町田」で開かれました。祭りは実行委員長から開会宣言があり、10時にスタートしました。

毎年恒例の永瀬正博さんの「馬頭琴」、山下孝之さんの「ケーナ」の素敵な演奏の後、オーストラリア出身の女装パフォーマーのレディー・ビアードさんが登場。会場は一気に盛り上がり、破天荒な歌と演技それに流暢な日本語で大変な人気でした。今年は夢広場が始まってちょうど20周年に当たるため、スリランカ大使館特命全権大使のダンミカ・ディサーナーヤカ氏を特別ゲストとしてお招きしました。大使は「日本とスリランカの懸け橋となって」と題して、過去の両国の交流の歴史を振り返りながら、両国の更なる交流を図りた

いとのこと挨拶をされました。

午後からもフィリピンのダンスから始まり、「オカリナ演奏」あり、町田落語研究会による「英語落語」あり、フラダンスありと盛りだくさんで、天気にも恵まれたこともあって街行く人も足を留め、楽しんでいました。

わりいはいは今年もラオス・山の民モン族が刺繍したブックカバー、ペンケース、小物入れなど販売しましたが、思いのほか売れ行きが好調でモン族への支援に少しでも役立ったのではないかと関係者一同嬉しく思っております。

この夢広場は、会場の狭さが難点ですが、今後どのような国際交流の場としていくのが課題と言えそうです。(報告:寺西)



オーストラリア出身のレディービアードさんはプロレスラーであり歌手でもある。女装パフォーマーとしてテレビでも出演して今や大人気である



ラオス山の民・蒙の女性たちが、心を込めて丁寧に刺した刺繍小物。ラオス在住でNHK 地球アゴラでも放映された安井清子さんが蒙の女性のための支援として指導している小物たちだ。12月3日のまちカフェ2017でも販売。この写真は透明カバーが掛かっていて鮮明ではないが、是非直接手に取ってその美しさを見て欲しい。



ケーナ演奏の山下孝之さん。今年は民族衣装で演奏

今回(10月15日)は、盛唐の詩人・王之渙の詩2首でした。王之渙(688年～742年)は李白や杜甫より少し年長で、植田先生によりますと李白に似ていて役人には向かなかったとのこと。県の「主簿しゅぼ」という下級役人に就いたのですが、周回とうまく行かず職を辞して15年間も無官の時代があったのです。科挙にも何回も挑戦したようですがとうとう合格できませんでした。

ただ詩の仲間との付き合いはいろいろあったようで、特に高適こうせき(702頃?～765年)や王昌齡おうしょうれい(698～755年)とは飲み友達(?)でいくつものエピソードが残されているそうです。例えば彼らは宴席でお互いに作った詩(歌)を妓女に歌わせて優劣を競ったりしました。王之渙は当時の流行歌の作詞家として知られ、彼が一首作ると楽士たちが争ってそれに曲を付けたと言います。

残念なことに王之渙の作った詩は6首しか残されていません。しかし今回ご紹介する詩2首によって彼の詩人としての名は永遠に歴史に残ることになりました。

ではまず「登鶴雀楼」(鶴雀楼に登る)から見てみましょう。「雀」はテキストによっては「鵲」となっているものもあります。ちなみに鵲はカササ

ギのことです。カササギといえば、ご承知のように年一回七夕の夜、牽牛と織姫がデートする時鵲が翼を並べて天の川を渡すと言う「鵲の橋」として有名ですね。「鶴」はコウノトリのことです。コウノトリが楼閣に巣を作ったのでその名が付いたとも言われています。鶴雀楼のあたりはその昔コウノトリやカササギが優雅に飛び交っていたのでしょうか。

その鶴雀楼は山西省・永済県の黄河を望む地にあった三層の楼閣だったそうですが今は残念なことにありません。黄河は柄杓を伏せたような形をしています。柄杓の柄の根本にあたるころにあったそうです。この楼閣に登って詠んだ詩です。

植田先生は最初の起句と承句について、「太陽は東から西に運行しますが、それとは逆に中国の大河はどれも西から東に流れていく。両者を対比する雄大で悠久な自然の描写は素晴らしい」と解説され、さすがに王之渙だと全員納得。更に最後の結句「更上一層楼」は中国では生徒が試験でいい点を取った時など、先生は、「『これに満足せず更に頑張れ!』といったりする時使ったりするんだよ」とニコニコしながら教えてくださいました。

dēng guān què lóu
登鶴雀楼

wáng zhī huàn
作者：王之渙

bái rì yī shān jìn,
白日依山尽，
huáng hé rù hǎi liú。
黄河入海流。
yù qióng qiān lǐ mù，
欲穷千里目，
gèng shàng yī céng lóu。
更上一层楼。

鶴雀楼に登る

王之渙

(鶴雀楼に登って眺めると)夕陽が山の彼方に沈んでいくの見える
(眼下に望む)黄河の流れが渤海に向かって流れていく
(この素晴らしい眺望に感動した私は)千里の彼方の大地まで見渡したい衝動にかられ
もう一段上の階に登って行った

涼州詞

作者：王之渙

huáng hé yuǎn shàng bái yún jiàn ,
 黄河远上白云间，
 yī piàn gū chéng wàn rèn shān 。
 一片孤城万仞山。
 qiāng dí hé xū yuàn yáng liǔ ,
 羌笛何须怨杨柳，
 chūn fēng bù dù yù mén guān 。
 春风不度玉门关。

涼州詞

王之渙

のぼ
 黄河上れば白雲の 果て無き彼方
 わび ばんじょう そび
 孤城侘しく万丈の 山聳えたり
 ようりゅう こてき
 手向けに手折る楊柳の 胡笛の調べ無くもがな
 ぎよくもん かん
 春は至らじ 玉門の関

「詩や文章の本来の意味から離れ、その中の一部だけ利用する『断章取義』だね」とも。

次に「涼州詞」に移ります。この詩は唐詩のジャンルにある「辺塞詩」の一つだそうです。彼は山西省・新絳県の出身で辺塞詩人として知られています。涼州は中国にかつて存在した州で、現在の甘肅省、寧夏回族自治区一帯の辺境の地でした。この地方に伝わる民謡をモチーフとして作られたのが「涼州詞」です。「涼州詞」という題名の詩は多く作られていますが、王之渙のこの詩もその一つです。

解釈の前に言葉の説明をしましょう。「孤城」は孤立した砦のこと、「仞」は古代の長さの単位で一仞は八尺に相当しますが、「万仞の山」は誇張表現です。「羌笛」は寂しく響く異民族のタテ笛。胡笛ともいいます。「楊柳」は折楊柳(柳の枝を折って旅立つ人へのはなむけに差し出す)のこと。後に楽府題(音楽の題名)になりました。ここでは胡笛による別れの曲です。なお結句の「春風」は「唐詩三百首」によるものです。「唐詩選」では「春光」になっています。また、テキストによっては題名が「出塞」になっているものもあります。

この詩は、特に転句と結句(3～4句目)の解釈が少し難しく参加者の皆さんはいろいろな角度から質問されましたが、咀嚼して自分なりに納得するには少し時間がかかるようです。植田先生によ

りますと、この詩は現地での体験を踏まえて作られたものではなく、流行り歌のスタイルに法って作られたもので、「正に演歌の世界のような歌と言えますね」とのこと。演歌の心でもって想像をたくましくして解釈する必要がありそうです。ここはやはり植田先生のお力をお借りしましょう。講座終了後、先生から頂いた訳詩でじっくりと味わってみたいと思います。

辺境の地の寂しさ、その雰囲気がよく伝わってきますね。さらに噛み砕いた下記の状況説明を頂きましたので、最後にここに記して10月の講座報告といたします。



黄河を遠く遡っていけば、遙か白雲の彼方に達するといわれる。

荒涼とした砂漠の中に、辺境守備の為の小さな砦があり、そこにはさらに高い山がそびえ立っていると聞く。

そんな淋しいところに旅立つ君よ。別れを惜しむ証として、昔の人は、柳の枝を折って旅立つ人に手向けたそうだが、その故事をもとにして作られた羌笛の悲しげな調べなど、今さら何の意味があろう。

遙か玉門関の彼方には、そもそも柳を芽吹かせる春風すら届かぬというのに。

第2章 高鳳蓮初期の剪紙-2

文と写真 周路

翻訳：有為楠君代

酉年に、高鳳蓮は多くの鶏を剪りましたが、それは単純な鶏の形ではなく、人々に崇高な鳥である吉祥の鳳凰を連想させます。

紙面いっぱい羽を広げ風を受けてはばたくそれらの鶏の剪紙は大きさも程よく、窓飾りとして貼っても、また持ち歩いて人にあげたり交換したりにも便利です。

「母鶏と雛」の剪紙は、巢で卵を抱いている雌鶏で、身を縮め風邪を通さないようにしている紙面の鶏には高鳳蓮の母心が溢れています。卵を抱きながらも、母鶏は、活力に満ち、首を挙げて胸を張り誇らしげです。

雄鶏は時を告げ、雌鶏は卵を産んで、山に住む人びとの生活は鶏たちと密接に結びついています。高鳳蓮は言います。「鶏は不思議な力を持っています。夜が明けるのを真っ先に知るのは鶏で、雄鶏が鳴くと太陽が顔を出し、目の前に光が満ち満ちて来ます」。

雄鶏は、雄々しく勇ましく、意気軒高として、自分の縄張りの中を飛ぶように歩き回り、まるで皇帝のように、縄張りの中に他の雄が入り込んで、支配下にある雌鶏たちを騒がせるのを許しません。雌鶏は、農村の人々にとってさながら、薪・米・油・塩と言った生活必需品の保管庫のようなもので、卵は売って現金収入を得ることが出来るし、からだの栄養補給源にもなります。雛を育てて、次代の鶏をもたらしめます。しかも雛を育て慈しむ姿は、人間の母親そっくりです。

ですから、高鳳蓮が剪る雌鶏は、愛情に満ち、ふくよかで、元気いっぱい、誇らしげな姿をしています。時には、雌鶏の尾の部分に子どもを剪り添えて、雌鶏が自分の子供と同じように大事なものだとして示しています(ページ下図左)。

農家の暮らしに、犬は欠かせないものです。彼らは農家の忠実な番人であり、家屋敷の守護神のようにふるまいます。良く見知った人には尾を振り、頭を下げて足元にすり寄って来ますが、見知らぬ人を見ると歯をむき出して吠え立て、飛び掛からんばかりに跳ね回ります。また、食べるものは何でも好き嫌い無く食べ、暑さ寒さにもよく耐え、24時間交代要員を必要としない衛兵の役割を果たします(下図右)。

高鳳蓮の剪り出す犬は、顔こそ怖そうな表情をしていますが、模様はのどかでかわいらしいので、鶏、猫、ウサギなどと同様に家族のような親しみを覚えます。高鳳蓮の剪紙の中の羊・兎・牛・ロバ・猪などは皆表情が生き生きとして魅力たっぷりで、作者の人間性が溢れんばかりです。



雄鶏



母鶏と雛



雌鶏



門番をする犬



腹這いの牛



仔牛

ものなく、空を自由に駆け回り、風を呼び、雨を降らせる力を備え、瑞雲に囲まれて、瑞兆である鳳凰やカササギを護る役目をするのだそうです。人間は、竜に最高の敬意を払い、毎年、天候の安定、家内平安、子孫繁栄を祈り、又、国家の安泰と民生の安定、

牛は、村人にとって大きな財産で、この地方では、「牛は、神様が人類を助けるために遣わして下さった有益な助手だ」と言われています。高鳳蓮の鋏が剪る牛は、無邪気で可愛らしく、忍耐強く従順で、人間の話をよく理解し、主人の意のままになります。のんびりと休んでいる牛、地面に腹這いになる牛、背中の小鳥が角の間の虫を啄もうとしている図など、慣れ親しんだ牛の様子が剪紙の上に剪り出されています。

牛のお腹の中では、子供が2匹の子犬と戯れている剪紙があります(上図左)。この画面の左上には蠅を追い払うように尻尾が振り上げられていて、右側の角と対比して画面のバランスをとっています。又別の剪紙(上図右)では、小牛が散歩しながらのんびりと草を食っており、子牛のしっぽの上では小鳥が無賃乗車を決め込んでいて、見る人の微笑みを誘います。どの図も、夫々に物語を語りかけていながら、画面の構成は充実してバランスが取れています。

民間伝説によれば、竜は天界の王で、世に並ぶ

経済の発展を祈ります。

また、陝北地域の人々にとって虎のイメージは、親しみ易く、やんちゃな感じで、虎のどう猛さなどない、まるで家で飼っている猫のようです。陝北地域では、虎はとつとに絶滅してしまい、人々は老人たちの話を聞いたり、先人たちが残した図柄を見たり、猫の写真をもとに描かれた虎から想像するばかりです。高鳳蓮の剪る虎は、生き生きと活気に満ちていますが、表現は簡潔です。紙面からは、小さな虎が今にも躍り出て来るようで、出てきたら、一緒に遊びたくなる雰囲気です。

艾虎と言うのは、ヨモギで作ったトラの形をした魔除けです。本来は、端午の節句に子供の頭につけて邪気を払うのに使うものですが、今では可愛らしい



艾虎

トラのおもちゃになっています。高鳳蓮の艾虎は、地上に伏せて、頭を下げて空を見上げ、炯炯と目を光らせて周りを注意深く伺っているようです。この艾虎はお腹を空かしており、母トラのお乳を求める鳴き声が剪紙から聞こえてくるようです。



龍



右図は、成年の花模様の虎です。首を絶えず動かして、油断なく辺りを伺っているようで、後ろ足は跳ね上げられて、何時でも走り出す姿勢をとっているのです。飛虎と呼ばれます。



花模様の虎

虎が兎を捕まえる下図の作品は、狩の図であって、遊びではないと言いながら、虎は兎と戯れ、駆けっこをし、虎の尾の上にはもう一羽の兎さえも見えます。



虎が兎を捕まえる生殖崇拜の図は巫術文化の名残だ

生まれ年を表す干支は、古代黄帝の時代に「地支」と言われた十二支にその源があり、白羊・金牛・双子・カニなど十二星座に関係しています。ごく早い時期には、十二支、十二星座は共に、毎年十二か月の気候、農作物の状態、季節を表していました。それが、十二の動物が十二支に代わって十二の月を表すようになったと言われます。干支の十二支を使って生まれ年を表すことは東漢の時から始まったようです。

何故十二種類の動物をマークとして選定したかは、最も早い時期の部落のトーテムと関係があるようです。古代、各部落は自分たちが特別に恐れる動物、或いは逆に愛着を感じる動物を選んでそれをトーテムとして各部落のマークとし、崇拝の対

象としたのでした。

また、ある学者は、十二支が先ず時間を区別するために出現したと指摘します。古代には、一日24時間を12刻に分けました。そして彼らは、時刻を観察しながら、十二種の動物の生活習慣と照らして、十二支を確定しました。それをざっと眺めみると、昔の人達の、動物に対する認識を知ることが出来て、興味深いものがあります。

深夜11時から翌日の1時までには子の刻ですが、人間が寝静まったこの時間に活発な活動をするネズミをこの時間に当て、“子鼠”としました。次の1時から3時までは、丑の刻です。牛は夜中のこんな時間に草を食べる習慣があるので、農家の人々は深夜に起きて牛に餌をやります。そしてこの時間は“丑牛”としました。

3時から5時は寅の刻です。この時間は夜行性の虎が最も狂暴になる時間で、人々は虎の唸り声を聴くことがよくありました。それで“寅虎”となりました。日の出頃の早朝、5時から7時は卯の刻です。空が明るくなると、兎は巣から飛び出して、朝露に濡れた青草を好んで食べます。それで、この時刻は、“卯兎”となりました。

早朝7時から9時は、辰の刻です。この時間はよく霧が出るので、人々は伝説の竜が霧の中、雲に乗って戯れているところを連想し、又朝日が東から昇り、時時刻刻高くなるのを喜んで、“辰竜”としました。午前9時から11時までは巳の刻で、霧も晴れて、うららかに太陽が昇るこの時間は、蛇の類も巣から出て食糧を漁るので、“巳蛇”となりました。

お昼、11時から1時は午の刻です。大昔、野生の馬が人々に飼いなされる前には、毎日、昼頃になるとあちこちを駆けまわり、いなないていたもので、“午馬”と名付けました。午後1時から3時は未の刻で、羊を牧草地に放すのに丁度いい時刻なので、“未羊”と言い慣わしました。

午後3時から5時までは申の刻です。太陽が西に傾くこの時刻、猿はよく鳴き交わすので、“申猿”としました。午後5時から7時は、酉の刻で、太陽



十二支・鼠



十二支・虎



十二支・兔



十二支・龍



十二支・馬



十二支・羊



十二支・鶏

が山の端に落ちると、鶏は鶏小屋の前を巡りながら眠る準備にかかるので、“酉鶏”と言います。

夕暮れ時の7時から9時は、戌の刻です。人間は一日働いて、門に門を掛けて休む準備をします。その時、犬は門の前に寝そべて、しっかりと門を守り、何事かあれば、大声で吠えて主人に知らせます。それで、“戌犬”です。夜間、9時から11時は、亥の

刻です。夜も深まり、人が寝静まると、猪が食べ物を漁る音がよく聞こえるので、“亥猪”としました。

このようにして、1日の24時間が12刻に分けられ、動物が割り当てられましたが、こののち、人々はこの12の動物を、年を記録するのにも当て嵌めて、生まれ年を示す干支が生まれました。これが、中国の農耕文化圏で干支が始まった謂れです。 **(続く)**

周路・陝北 30 周年回顧・記念展「黄色い大地」、北京で開催



美術館前に掲げられた大看板

‘わんりい’誌上で、陝北(陝西省北部黄土高原地帯)の剪紙作家・高鳳蓮さんを紹介くださっている周路先生が、30年に亘って現地を撮影した写真60点と、自ら制作した木版画60点を、広い会場いっぱいに展示した、回顧・記念展が北京朝陽区の「炎黄美術館」で2017年11月2日～6日に開催されました。



開幕式では、北京中央美術学院版画科主任夫妻、中国美術館副館長、開催会場の炎黄美術館館長、安徽財經大学教授夫妻、安徽財經大學美術学院院长・他による、周路



開幕式

先生の陝北での活動の意義と作品の素晴らしさをたたえる祝辞が続き、版画家、版画収集家、写真家及び出版社・他の多数の参加によって展覧会がにぎにぎしく開幕しました。町田市などで‘わんりい’が協力し、何回か開催した折の懐かしい作品と共に、近年の、新しい画風の大作も展示され、回顧展の名にふさわしい見ごたえのある展覧会でした。 **(報告：田井)**

入場無料

日本中国友好写真協会第1回 公募写真展 / 第9回ゲーサンメド写真展

「中国大陸に行く」日中両国民の相互理解と友情を深め、多くの方たちに中国大陸の実情を知ってもらおう!

- 2017年12月15日(金)～12月21日(木) 10:30～19:00 (最終日:14:00) [土日祝日11:00～14:00]
- 富士フォトギャラリー銀座スペース7〈1・2〉 <http://www.prolab-create.jp/gallery/ginza/>
(〒104-0061 東京都中央区銀座1-2-4サクセス銀座ファーストビル4F ☎03-3538-9822)地下鉄銀座線京橋駅3番出口より徒歩1分、地下鉄有楽町線銀座一丁目駅7番出口より徒歩1分、JR有楽町駅 京橋口より徒歩5分
- 主催:日本中国友好写真協会 NPO 法人チベット高原初等教育・建設基金会ゲーサンメド
- 問合せ: ☎03-5912-1232 (烏里烏沙)

東京中国文化センター・映画の日

ウォーキング・トゥー・スクール (監督: 彭家煌、彭臣)

(原題: 走路上学 2009年 90分 / 字幕: 日本語)

7才の僥僥族の男の子、瓦娃は、毎日、ケーブルを伝って川向こうの学校に通う姉のことをうらやましく思っていました。お母さんは、お父さんが帰るまではダメと許してくれません。川向こうの誘惑に負けた瓦娃は、ある日、こっそりと河を渡りました……。

- 日時: 12月14日(木) 14:30受け付け開始 上映15:00～
- 会場: 東京文化センター ● 入場無料 ● 全席自由席(定員30名)
(東京都港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F ☎03-6502-8168)
- 申し込み方法
 - ① 中国文化センターホームページのイベント下記一覧ページ
<https://www.ccctok.com/event/> より申込
 - ② 上記電話番号で ※入場チケットの発券はなし。当日受付で名前を確認。

入場無料



和光大学オープン・カレッジばいであ「クラシック音楽の楽しみ方—西洋音楽史入門」

和光大学 Open Concert 無伴奏組曲 / チェロを聴く

岡田裕人(チェロ) / 中川友美(ピアノ) / 司会・解説: 中川つよし(和光大学非常勤講師、ばいであ講師)

- 2017年12月15日(金) 14:40開演 誰でも入場できるが、未就学児童不可
- 和光大学 E-101 教室(小田急線鶴川駅南口から徒歩15分)
※スクールバス(無料)をご利用可(乗車の際「Open Concert」に参加の旨を伝える)
※スクールバスの時刻表は和光大学WEB サイトで確認

入場無料



◆演奏曲目

- ♪ J.S. バッハ: 無伴奏チェロ組曲 第2番
- ♪ R. ボッケリーニ: ソナタ第6番 イ長調
- ♪ G. フォーレ: 夢のあとに、シシリエンヌ
- ♪ C. チャップリン: エターナリー
- ♪ A. ピアソラ: リベルタンゴ…他

【岡田裕人プロフィール】12歳よりチェロを始める。桐朋学園大学アンサンブルディプロマコース修了。現在、シュベークアンサンブル、プラムスカルテットなどの室内楽やフリーのオーケストラ奏者として活躍中。日本演奏家コンクール奨励賞受賞。アルル音楽学園講師

【中川友美プロフィール】昭和音楽大学短期大学部卒業、同専攻科を経て、同ディプロマコース修了。国際芸術連盟主催第25回新人オーディション合格、奨励賞受賞。現在、ソロ、室内楽等で演奏活動を行う傍らピアノ教室を主宰し、後進の指導にあたっている。板橋区演奏家協会会員 ※当日は、会場の都合で電子ピアノを使用します

- 問合せ: 和光大学 企画係 大学開放フォーラム ☎044-988-1433 / E-mail: open@wako.ac.jp

【12月定例会開催日及び2018.1月号おたより発送予定日】

◆ 問合せ: ☎044-986-4195(わんりい)

- 12月の定例会: 12月19日(火) 13:30～ 三輪センター・第三会議室
- 2018年1月号おたより発送日: 12月28日(木) 10:30～ 場所: 三輪センター・第三会議室
※ おたより発送日はお弁当を持参ください。

‘わんりい’も参加! 町田市民のお祭り

第11回 市民協働フェスティバル「まちカフェ!!」

入場無料

町田市内で活動するNPO法人や市民活動団体、地域活動団体(町内会・自治会)が一堂に集う!! さあ、活動を発表して交流を深めよう!! 皆さん、是非、覗きに行こう!!!

- 2017年12月3日(日) 10:00～16:00
- 町田市役所・全館(〒194-8520 東京都町田市森野2-2-22) ☎042-722-3111(代表)

▲‘わんりい’の会は、下記で参加します

- ①ラオス山の民・モン族の手の込んだ刺繍小物を販売
- ② ‘わんりい’誌に掲載中の、日中水墨協会・会長・満柏画伯による水墨画の体験
水墨画で描く年賀状に挑戦しよう!

▲水墨画の年賀状に挑戦はいかが?

- 申込みはなくとも大丈夫!
- 紙、筆、などの持ち物不要です。
- 体験時間帯 11:00～12:30, 14:00～15:30

【満柏プロフィール】

965年、中国の遼寧省生。祖父、母親は中国の著名な画家。

中国の美術大学を卒業後、1988年、来日。日本の大学に入学し、日本文化思想など学ぶ。1996年から1999年、横浜市林光寺の天井画と障壁画を描く。1996年中国水墨画で「日本の自然を描く」展を開催。個展及びグループ展開催多数。水墨画・書の傍ら、美学芸術論を研究し、独自の美学論芸術論を唱えている。

- 日中水墨協会会長 ● 中国水墨芸術家連盟常務理事 ● 全日中展審査員 ● 東京中国書画院常務理事
- 日本華僑華人文芸芸術家連合会理事 ● 「水墨之友」編集委員 ● 美術大学非常勤講師。

▲問合せ: ☎042-734-5100 ‘わんりい’



小田急線町田駅西口から徒歩約8分、JR横浜線町田駅中央口・小田急線連絡口から徒歩約11分

恒例! ‘わんりい’新年会日取り決定!!

2018 ‘わんりい’新年会・シュワンヤンロウで新年を祝おう

場所: 麻生市民館・料理室

(小田急線・新百合ヶ丘下車北口3分麻生総合庁舎内)

2018年2月4日(日) 11:00～14:00

- 定員: 先着40名(‘わんりい’会員と関係者のみ。お早めにお申込下さい)
- 参加費: 1500円(会場費 シュワンヤンロウ材料及び福引景品購入)
- 申込: メール: wanli@jcom.home.ne.jp TEL/FAX: 042-734-5100(わんりい)



初心者のための体験のお誘い

【鶴川水墨画教室】

- 講師: 満柏(日中水墨協会・会長)
- 場所: 鶴川市民センター
(町田市大蔵町1981 駐車場有)小田急線鶴川駅からバス「鶴川市民センター入口」下車
- 曜日・時間: 14:00～16:00
毎月第2、第4(月)
- 体験参加費: 1000円
(見学無料/手ぶらで参加可)
- 問合せ: 野島 ☎042-735-6135



小学生のための国際理解体験

(対象: 小学4年生～6年生 24名)

- ※ゲーム形式で留学生や外国人とコミュニケーションを取り、国際的な感覚を身に付ける。参加費: 300円
- 12月26日(火) 13:30～16:00
- 場所: 町田国際交流センター 講習室
- ▲申込: 往復ハガキに ①子どもの名前・ふりがな・学校名・学年 ②保護者名③住所・連絡先を記入の上、下記住所に投函。
(返信ハガキにも必ず住所を記入。※申込み多数の場合は抽選。返信ハガキにて結果を通知)
- (財)町田市文化・国際交流財団 町田国際交流センター
〒194-0013 町田市原町田4-9-8 町田市民フォーラム4F
☎042-722-4260 ●締切: 12月15日(金)必着
- 主催: 町田国際交流センター 国際理解部会

◆わんりいの講座

中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

- ▲まちだ中央公民館 10:00～11:30
12月10日(日) 第3・第4学習室
1月28日(日) 第3・第4学習室

▲講師：植田渥雄先生
(桜美林大学名誉教授、
現桜美林大学孔子学院講師)



- ▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲定員：20名(原則として)
- *録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)
E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)

◆わんりいの催し

**ボイストレーニングをして
日本の歌を美しく歌おう！**

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体の力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！

- 12月19日(火)10:00～11:30
- 12月23日(火)10:00～11:30
- 共にまちだ中央公民館 視聴覚室
- ★動きやすい服装でご参加ください



- 講師：Emme(歌手)
- 会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- 定員：15名(原則として)

◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)
E-mail:wani@jcom.home.ne.jp(わんりい)

会員募集！【中国語入門サークル】

和気藹々と中国語を勉強しているサークルです。楽しみながら中国語を始めませんか。見学ご希望の方は気軽にお問合せください。

- 会場：町田中央公民館(原則として)
- 日時：第1・第2・第4土曜日
10:00～12:00
- 会費：4,000円/月
- 講師：郁唯(天津師範大学卒)
- ◆問合せ：☎042-725-3963(森川)
E-mail:yamorikawan@ybb.ne.jp

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を！

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。各位からいつもたくさんの切手をお届け頂いて感謝申し上げます。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついでの折に田井にお渡し下さい。

【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又会の活動についてのご希望やご意見及び'わんりい'に掲載の記事などについても、ご感想をお待ちしています。

日中文化交流市民サークル 'わんりい'

'わんりい'は、毎年4月から新年度になります。ご継続をよろしく願います。また、新入会をいつでも歓迎します。途中入会の方には会費の割引があります。お問い合わせください。

年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011 'わんりい'

'わんりい'の名は、'万里'の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。入会されると、

- ①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。
- ②'わんりい'の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100(事務局)

- ◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい'わんりい'をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。
- ◆町田各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

'わんりい' 229号の主な目次

「寺子屋・四字成語」集思広益(8).....	2
論語断片(32)其の往を保たざるなり.....	3
混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義(19).....	4
東西文明の比較(20).....	6
大連・鞍山・本溪の旅(その5).....	8
中国の笑い話35.....	10
4年ぶりの北京.....	11
活動報告【町田発国際ボランティア祭2017夢広場】.....	13
「漢詩の会」盛唐の詩人・王之涣の詩2首.....	14
黄土高原に咲く目にも彩なる花々IV.....	16
'わんりい'掲示板.....	20・21・22

寒くなりました。皆様、お元気でよい年をお迎えくださいませ。来年も皆で楽しい企画を考えて活動を楽しみましょう！'わんりい'事務局一同

